

令和 6 年 5 月 9 日現在

機関番号：27501
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：21K10580
研究課題名（和文）看護系単科大学における学生の異文化感受性を高める国際看護学教育プログラムの検討

研究課題名（英文）A Study of an International Nursing Education Program to Enhance Intercultural Sensitivity of Students at a Nursing College

研究代表者
丸山 加菜（Maruyama, Kana）
大分県立看護科学大学・看護学部・助教

研究者番号：10835797
交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,100,000円

研究成果の概要（和文）：看護系単科大学で実施したオンライン国際交流の参加学生を対象に質問紙調査を複数回実施した。オンライン国際交流による異文化感受性（Intercultural Sensitivity Scale：ISS）の上昇や学習意欲・コミュニケーションスキルの向上が明らかとなった。交流前に事前学習の機会を設けることで、効果的にISSの上昇が認められた。また、オンラインという状況下での交流がコミュニケーションにおける対人スキルの向上に繋がると示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

COVID-19感染拡大以降、国際看護教育の一環としてICTを活用した国際交流が急速に普及しているが、ノウハウの蓄積が少なく学習効果の検証が求められている。本研究では、オンラインで実施する国際交流の意義が整理され、国際看護教育の一つの手段として効果的であることが明らかになった。プログラム内容を継続的に評価していくことで、低学年からの早期体験学習としての活用や、身体的・経済的理由により海外での国際交流・研修等への参加が困難な学生に対する教育を行う一助となり、内なる国際化が進む日本の医療現場で活躍できる人材育成に繋がると期待される。

研究成果の概要（英文）：A questionnaire survey was conducted multiple times to students participating in an online international exchange at a nursing college. The results revealed an increase in the Intercultural Sensitivity Scale (ISS), motivation to learn, and communication skills. ISS was effectively increased by providing the participants with prior learning opportunities before the exchanges. The results also suggest that online international exchange can improve interpersonal skills in communication.

研究分野：国際看護学

キーワード：国際看護教育 異文化感受性 看護系単科大学 オンライン交流

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

グローバル化による在留・訪日外国人の増加に伴い、日本国内の医療現場でも外国人患者をケアする機会が増加している。2020年に入り、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的大流行により外国人の入国者数が激減したが、少子高齢化による労働力減少や社会経済の活性化対策のため、流行の収束後には、再び、技能実習生や留学生、訪日外国人が増加すると予測される。しかし、日本の医療現場において、看護師が問題と捉えているのは多くがコミュニケーションの問題であり、日本人看護職の文化的対応能力は諸外国に比べて低い(谷本ら 2020)。

外国人患者の看護経験を有する看護師の Intercultural Sensitivity (異文化感受性) は、専門職としての自律性発揮の最も大きな影響要因であり、看護職者に対して文化の気づきを促す教育を大学、大学院、継続教育に取り入れていく必要がある(Kuwanoら 2015)。近年、看護学士教育課程で異文化感受性を高めるための海外研修が推進されてきた。しかし、感染症の流行下において海外渡航は難しく、日本国内で実施する異文化感受性を高めるための国際看護学教育が求められている。

2. 研究の目的

ICTを活用したオンライン国際交流前後の看護学生の異文化感受性(Intercultural Sensitivity)の変化について明らかにし、学部教育における異文化感受性を高める国際看護学教育プログラムを検討することを目的とした。

3. 研究の方法

A 看護系単科大学が国際交流協定(MoU)を締結している韓国およびインドネシアの大学と行ったオンラインによる国際交流に参加した学生を対象者として調査を実施した。

調査1(2021年度)では、韓国の看護学生とのオンライン国際交流前後に、基本属性および異文化感受性尺度(以下ISS)と学習意欲の変化などについて無記名自記式質問紙調査を実施した。また、交流後に変化した異文化や看護に対する考え・気持ちについて、インタビューガイドに基づく半構造化面接調査を実施した。

調査2(2022年度)では、調査1を踏まえて交流のセッションや時間を増加させ、韓国の看護学生とのオンライン国際交流前後にGoogleフォームによる無記名自記式質問紙調査を実施した。質問項目は、ISSおよび今回のオンライン国際交流での経験についてなどであった。自由記述については、質的帰納的に分析した。

調査3(2023年度)では、調査1・2の結果を踏まえ、交流前に他国の文化や医療制度、異なる文化・社会・言語背景をもつ人々とのコミュニケーションについての学習機会を設け、インドネシアの看護学生とのオンライン国際交流を行い、交流前後にGoogleフォームによる無記名自記式質問紙調査を実施した。質問項目は、ISS、コミュニケーション・スキル尺度(以下ENDCOREs)および今回のオンライン国際交流での経験についてなどであった。

4. 研究成果

調査1: オンライン国際交流参加者を対象とした質問紙調査およびインタビュー調査

2021年8月に実施された韓国の大学の看護学生とのオンライン国際交流(大学イベントとして開催)の参加学生16名に対し、交流前後の無記名自記式質問紙調査および交流後の半構造化面接調査を実施した。対象者は、質問紙の回答が得られた12名およびインタビューの同意が得

られた 9 名であった。質問紙調査で ISS の交流前後を比較した結果、合計の平均点が交流前 90.67 ± 7.75 点、交流後 91.25 ± 11.33 点であり、合計及び 3 つの下位スケールで僅かに平均値が上昇したが有意な差はなかった。対象者ごとの前後比較では、交流後に得点が増加した人数が多い下位スケールは「Interaction Engagement」と「Interaction Confidence」であった。インタビュー調査では、分析した結果、7 個のカテゴリーが抽出された。カテゴリーは、【学習に関する気づきと意欲向上】【活動の幅の拡大への端緒】【ポジティブな心理的变化】【自己の内面的な成長と気づき】【文化や制度に関する気づきと関心の高まり】【看護学生としての意識の変化】【オンライン交流の良さ】であった。対象者は、交流によって不安な気持ちが楽しさや嬉しさへ大きく変化し、【ポジティブな心理的变化】が生じていた。ISS の「Interaction Confidence」が増加している対象者が半数を占め、対面交流に比べ非言語的コミュニケーションによる情報が少ないオンラインでも交流により自信を失うことなく達成感が得られ、チャレンジ精神の出現や学習意欲の向上といった効果があることが示唆された。

調査 2：オンライン国際交流参加者を対象とした Google フォームによる質問紙

2022 年 8 月に実施された韓国の大学の看護学生とのオンライン国際交流（前年度の交流よりセッションおよび交流時間を増加し、大学イベントとして開催）の参加学生 28 名に対し、交流前後に Google フォームによる無記名自記式質問紙調査を実施し、24 名から回答を得た。ISS を交流前後で比較した結果、合計の平均点が交流前 88.42 ± 8.81 点、交流後 89.25 ± 6.89 点であり、合計及び 3 つの下位スケールで平均値が増加し、そのうち「Respect for Cultural Differences」は有意に増加した。「Interaction Attentiveness」については有意に低下した。対象者ごとの前後比較では、交流後に得点が増加した人数が多い下位スケールは「Respect for Cultural Differences」と「Interaction Confidence」であった。学習意欲が増加した項目では、「語学」の回答が最も多く、「英語の能力を向上させたい」、「韓国人学生からの刺激」が学習意欲向上の上位の理由であった。コミュニケーションに関連した自由記述では、【単語やジェスチャーを交えたコミュニケーション】【複数言語を使用したコミュニケーション】【翻訳機でのコミュニケーション】【韓国人学生の協力的な態度】【自身の積極的な態度】といった、コミュニケーション方法の工夫や交流時のポジティブな姿勢がみられた。

調査 3：オンライン国際交流参加者を対象とした Google フォームによる質問紙

調査 1・2 の結果を踏まえ、交流前に他国の文化や医療制度、異なる文化・社会・言語背景をもつ人々とのコミュニケーションについての事前学習を行った。2023 年 9 月に演習科目の一環として実施された、インドネシアの大学の看護学生とのオンライン国際交流の参加学生 41 名に対し、交流前後 Google フォームによる無記名の自記式質問紙調査を行い、34 名から回答が得られた。ISS については、対象者の総合計得点の平均は交流前が 80.94 ± 9.33 点、交流後が 87.06 ± 8.17 点であった。合計点および全ての下位スケールにおいて、交流後の平均値が増加し、合計点および 3 つの下位スケールは、有意に増加していた。対象者ごとの変化については、合計点および全ての下位スケールにおいて、交流後の得点が高かった人の方が多かった。ISS の交流前後比較では、調査 1・2 よりも交流前後の ISS の増加が多くの項目で認められ、事前学習を通して異文化への関心や理解が高まったと考えられた。ENDOCORES については、対象者の総合計得点の平均は交流前が 29.13 ± 3.51 点、交流後が 29.85 ± 4.45 点であった。交流前後比較では、対人スキルの 2 つの下位スケールが有意に増加しており、少人数グループでの交流のため学生の主体的な参加が求められたことで対人スキルの向上につながったと考えられた。一方で、基本

スキルの下位スケール1項目は優位に低下しており、オンライン特有の通信状況の問題や学生の語学に関するレディネスが要因として考えられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 丸山加菜
2. 発表標題 オンラインによる異文化交流が看護学生に及ぼす影響
3. 学会等名 日本国際看護学会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 丸山加菜
2. 発表標題 看護系単科大学における学生のオンライン国際交流による異文化感受性の変化
3. 学会等名 グローバルヘルス合同学会2023
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	桑野 紀子 (Kuwano Noriko) (30550925)	大分県立看護科学大学・看護学部・教授 (27501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------